

日吉台地下壕保存の会会報

第81号

日吉台地下壕保存の会

年頭の挨拶

日吉台地下壕保存の会会長 大西 章

日吉台地下壕の保存の会の皆様あけましておめでとうございます。本年もよろしく日吉台地下壕保存の会のご支援をよろしくお願ひします。

この1年保存の会は地下壕見学会を中心に活動に活動をしてきました。昨年に引き続きガイド養成講座partⅡを約20名の参加者で継続的に行ってています。この講座は2つの意味があります。一つは現在手薄なガイド陣を新しい方々の力でより強化していくこと、もう一つは講座を通して自ら勉強し、自分たちの力をより向上していくことです。仕事や家庭の仕事の合間にを利用して頑張っています。これからも期待をしてください。

「平和のための戦争展」も14回目を数えました。今年はマスコミにも取り上げられ多くの方の入場者があり、特に「黒塗り教科書」は注目されました。国家が教育を統制しようとしたときに何が起きるかは歴史が教えるところです。最近この過ちをまた繰り返す動きがあります。

中高等学校の履修漏れ問題に始まり、教育基本法改正、教育再生会議の議論「教育委員会に文部科学省が指導できるようにすべきだ」はその流れの中で理解すべきであると思います。一人ひとりが相手の立場を尊重して自由に話し合えることの大切さを守らなければいけないと思います。

夏に慶應大学留学生14名と慶應大学学生を合わせて約50名の学生を地下壕に案内しました。留学生の出身国はアメリカ、ベトナム、イスラエルなど10カ国になりました。各国留学生の反応は様々でしたが「今国で犠牲になっている多くが女性や子ども。戦争で問題は解決しない」「ホロコーストを謝罪したドイツのような対応を日本はしたのか」など自分達が育った背景からいろいろと問題提起がありました。これから世界を担う若い人たちが自分の歴史認識の上に立ち議論することは『美しい国』などの歴史観では理解できない言語や宗教を越えた相互理解の原点であると感じました。

また小中学校の熱心な取り組みにも敬意を払います。自分で物事を考える大切さを議論や作業を通して教えることは重要だと思います。

これからも日吉台地下壕を媒介として「平和を考える」サポートをしていきたいと思っております。今年もよろしくお願ひします。



朝日新聞(2006.8.13)

国籍を超えて意見交換

慶大キャンパス内 留学生ら地下壕たどる

留学生は「日本にそんなものはあります」と笑顔で答えた。一方で、「日本人が率先して戦争をする」という意見も持つ。「（米国は）なぜ戦争をするのか、なぜ世界を壊すのか、なぜ自分たちが戦争をするのかを議論する必要がある」と語った。その後、壁に向かって静かに頭を下げる留学生たちの姿が印象的だった。最後に、各留学生が「自分たちの命を守るために、自分たちの命を守るために、自分たちの命を守るために」と唱和した。最後に、各留学生が「自分たちの命を守るために、自分たちの命を守るために、自分たちの命を守るために」と唱和した。

第14回横浜・川崎平和のための戦争展成功裡に終わる

亀岡敦子

いつの間にか横浜・川崎平和のための戦争展も、今年14回目をむかえました。地域に残る戦争遺跡である日吉台地下壕・蟹ヶ谷通信隊地下壕・登戸研究所について、少しでも多くの方に伝え、保存運動への理解を深めもらうために始めたものです。写真や実物資料の展示と、その年のテーマにそった講演やシンポジウムや朗読などを、欠かせない両輪と考えて、開催してきました。運営は、保存の会運営委員や法政二高教員を中心とした実行委員があたり、経費はそのほとんどを寄せられた賛助金で賄ってきました。誰に遠慮することなく、講師を決め、展示内容を決めることができました。こんなに有難く贅沢な催しはないかもしません。

今回のテーマ「日本人の戦争観を問い合わせなおす」は、いまこそ必要な問い合わせであり、私たちの活動「戦争遺跡保存」の意義を問い合わせなおすことでもあります。11月21日から25日まで慶應義塾日吉キャンパスは、天候にも恵まれ、複数の新聞報道の影響もあり展示会場とイベント参加者あわせると、約400人の来場者がありました。ギャラリーでの展示について報告します。

横浜・川崎平和のための戦争展」が二十一日午前十時から開かれ、午後二時からは、ノンバス内の来
往客で開かれ
る。展示会や

平和を考え「戦争展」

きょうから
日吉の慶大

シンボシウム

などを通じて、戦争の悲惨さと平和の尊さを伝え
る。同展実行委員会の主催者、日吉の慶大の慶大は、満州国(現い合わせば、同慶実行委員会事務局)6-45(5-6-1)午後一時から俳優の畠田(中国東北部)で使われた、下級兵士の教科書や神奈川の戦争遺跡の写真、市民の描いた
メインイベントとなる視点で「戦艦武藏の最初の写真、市民の描いた
(石曾根剛)

神奈川新聞(2006.11.21)

平和考え「戦争展」 きょうから 日吉の慶大

展示会は
午前十時～
午後四時
半。二十三

- 戦前・戦中・戦後の教科展
法政第二高校所蔵の貴重な教科書を展示了しました。

戦前戦中の教科書に、懐かしそうに見入る年配のかたも、初めて見る若い世代も満州国の文字のある教科書や、敗戦直後の、軍国主義的な箇所には、すべて墨を塗つてある教科書には、熱心に目を留めていました。墨を塗っていないものと並べてあったので、内容が解り好評でした。



朝日新聞(2006.11.22)

○ 日吉台地下壕關係

壕内の写真のほかに図面や年表の展示、寄宿舎の設計者谷口吉郎に関する特別展示、沖縄と日吉を繋ぐ電文のコピーなどがあります。しかし、だれもが興味深そうに見入ったのは、連合艦隊司令部地下壕の排土からみつかった皿の破片、碍子、木片、靴クリームなどです。実物には大きな力があります。

○ 蟹ヶ谷壕と登通信隊地下戸研究所

写真展示が中心ですが、保存に関する動きにも、注目している人の多いことと、神奈川県全域の戦跡に、関心が寄せられていることに感動をおぼえました。

○ 市民が描いた戦争の記憶

市民に呼びかけて戦争体験の一場面を、描いてもらいキャプションを添えて展示しました。戦場、空襲、学童疎開など、技術をこえて、強くせまるものがあります。



市民が描いた戦争の記憶

○ 紙芝居「満蒙開拓青少年義勇軍とシベリヤ抑留の体験を伝える」



紙芝居実演（成田富男氏）

広報紙をみて市民の絵画に応募してくれた、港北区在住の成田富男さん自作自演の紙芝居です。成田さんは、小学校や福祉施設で語り部としての活動を続けています。ギャラリーの奥にコーナーを設け、希望があると一日に何度も上演し、ユーモアの中に込められた、悲惨な体験は、観客によく訴えるものがありました。



紙芝居(成田富雄氏)

今年も、盛会であったと言えるでしょう。展示会場にいて気がついたことは、誰もが驚くほど時間をかけて、じっくり説明文も読みながら、見ていくことです。しんとした空気が漂い、まなざしが真剣でした。イベント会場の参加者も、真剣に聞き入っていました。毎年続けるのは、本当は大変なのですが、終わると、この近年増殖している不気味な空気に抵抗するためにも、来年もやめられないと思うのです。賛助金をお寄せくださった皆様、会場におこしくださった皆様に、心から感謝もうしあげます。

第14回横浜・川崎「平和のための戦争展」のイベントに参加して

皆川雅樹

2006年11月25日（土）、第14回横浜・川崎「平和のための戦争展」のイベントとして、「戦争観と追悼を考えることをテーマとしたシンポジウム、富田祐一さん（青年劇場俳優・方言指導）のひとり語り「下級兵士がみた沈没戦艦武藏の最期」、田中伸尚さん（ノンフィクション作家）の特別講演「靖国神社と憲法」が行われました。

シンポは、韓国からの韓国出身留学生の鄭鐘南さん（明治大学大学院博士後期課程）、ドイツからのスイス出身留学生のクリスティアン・グミュラーさん（専修大学学部生）と日本側からとして私皆川（法政大学第二中・高等学校教諭・専修大学大学院博士後期課程）がパネリストで、齋藤一晴さん（法政大学第二中・高等学校講師・明治大学大学院博士後期課程）が司会進行で、靖国神社と追悼というテーマで意見交流会を行いました。なお、このシンポのプレイベントとして、パネリストのメンバーで靖国神社の見学を行っています。

留学生のお二人が、予想以上に熱く語ったこともあり、私がいる必要性がどれだけあったのか、疑問な部分もありますが、私も少々話をしてきました。留学生からは母国などの戦争に対する意識や靖国神社のイメージなど、「日本人」よりも意識的にとらえていることが示されました。また、専修大学新井ゼミの学生たちや法政二高の高校生が2人来て発言するなど、戦争を知らない世代が積極的に参加し発言するという良い光景もありました。最後に、今回の戦争展の顧問でもある白井厚先生（慶應義塾大学名誉教授）から、戦争を知らない若い世代へ、改めてしっかりと戦争観・追悼の意味を考えて欲しいとのコメントもあり、充実したシンポとなりました。



シンポジウム「戦争観と追悼について考える」

富田祐一氏によるひとり語り
「下級兵士がみた沈没 戦艦武藏の最期」

富田さんの語りは、さすが俳優さんということもあり、ただただ聞き入ってしまいました。秋田県の小さな集落から徴兵で海軍にとられた戦艦武藏の乗務員が見た沈没の様子を、あたかもそこで今沈没している戦艦があるのではないかと錯覚するほどの語りには脱帽しました。

田中さんの講演は、最初おだやかな感じで最近の安倍政権による政治情勢と歴史認識の問題から入り、そこからだんだんと気持ちが乗ってきて、最後の方ではかなりの熱弁となっており、時間も超過していましたが、聞き応えはありました。特に、近年の靖国参拝訴

訟や合祀取消訴訟の実態を原告側の生の資料と聞き取りをもとに説明を聞くと、国家と「靖国」、そして「国民」の歴史認識、それに関わり憲法

「改正」と政教分離原則の意味などを改めて考えなければならないことを思い知られました。

1日という短い時間でこれだけの充実したイベントによって、戦争を知らない若い世代にどれだけ現状認識と戦争の意味を問うことができるかは計り知れません。しかし、この1日で終わりにするのではなく、ここから改めて戦争を問う意味を発信できればと考えるのは私だけではないと思います。日本が「戦争国家」にならないように…。



田中伸尚氏講演「靖國神社と憲法」

☆港北区ふるさとサポート事業

中間活動報告会開かれる

喜田美登里

日吉台地下壕保存の会は、昨年に引き続き港北区のふるさとサポート事業に応募、助成金を受けて、活動を行っています。その中間報告会が2006年11月23日(木)港北区役所会議室に於いて行われました。報告会は15団体が各報告5分、意見交換4分を行い、日吉台地下壕保存の会も「ピースロードふるさと港北PARTⅡ」として三つの活動を提案、現在実施中の活動を報告しました。

①日吉の戦争遺跡ガイド養成講座

～戦争遺跡を歩いて平和の語り部となろう～

地域の戦争遺跡や歴史を知り、案内できるガイドの養成を行う講座。昨年は60名と多くの参加者が集まり慶大4年生と定年退職者各1名がガイド候補として活動している。今年も21名の参加があり、ガイド養成に取り組んでいる。

②「市民が描いた戦争の記憶」で絵画募集、展示。今年も新たに絵画が集まり、「横浜・川崎平和のための戦争展(11月21日～25日)展示予定。

③地域学習の資料を児童・生徒に配布。昨年度作成した冊子「戦争遺跡を歩く 日吉」を増刷し、11月現在700部以上を地下壕見学した児童・生徒や資料を希望する学校等公共施設に提供した。今後は様々なジャンルの団体とのような交流が可能か考えていきたい。ふるさと事業委員より養成講座から2名のガイド候補が出たこと、特に慶大生について質問があった。冊子の提供等、地域にとって重要な活動を地道に着実に続けていることを評価された。

最終の活動報告会「港北よりあい処」は2007年3月17日(土)に慶應義塾大学日吉キャンパス来往舎で実施予定。

子どもたちの学習活動と日吉台地下壕

昨年の11月18日(土)日吉台小学校で学習発表会が行われ、日吉台地下壕を地域学習の教材として 地域の学校が取り上げている様子を保存の会運営委員が見学してきました。

「日吉台フェスティバル～かがやけ日吉台」と題して行われた学習発表会では6年生が「日吉 温故知新」のテーマで日吉の地域の歴史を「大昔の生活」「金蔵寺」「戦争と子どもたち」「日吉台地下壕」の4つのグループに分かれて調べ、発表しました。体育館では「戦争と子どもたち」のグループが学童疎開、空襲と苦しい時代を通ってきた自分たちの学校の先輩の子どものころの様子を劇にして発表しました。また教室では「日吉台地下壕」グループが地下壕のジオラマを展示し、説明員を立てて地下壕の概要について説明していました。これらの事前学習では実際に地域のお年寄りからの聞き取り調査が行われ、また総合学習の時間などで授業の中で日吉台地下壕に見学に来て、調べた結果が発表されました。子どもたちの真摯に、また生き生きと学ぶ姿が印象的でした。

昨年の高校の未履修問題に見られるように近現代の歴史を知らぬまま、学校を卒業していく若者が増えていく現実を思うに付け、地域で近現代の歴史を学ぶことの出来る日吉台小学校の子どもたちは大変幸せだと思われることでした。子どもたちが日吉台地下壕を実際に見学することで地域の歴史を実感し、戦争と平和について学ぶ・考える、良い機会を持つことは私達にとっても本当に嬉しいことで、この活動を続けてきた大きな成果だと思います。

こうした課外ではなく授業の中での総合の時間などを活用した地域の学校の地下壕見学会は、ここ数年急激に増加し、2006年だけでも 矢上小、日吉南小など地域の小学校6校、また中学校では鴨居中や市外の公立中学校などが見学に訪れています。また高校でも慶應高校4クラスや私立の中高校の「地域学習」「平和学習」の増加、慶應国際会などの大学生や他大学のゼミも講義の一環として見学に訪れています。学校教育の中での史跡としての日吉台地下壕の更なる活用が望まれます。



日吉台地下壕ジオラマ(日吉台小学校)

日吉の戦争遺跡ガイド養成講座 PART II 実施中

昨年度に引き続き日吉の戦争遺跡について深く知り、考え、案内できるガイドをめざす本講座は、下記の日程で、第3回まで行われました。港北区の「ふるさとサポート」の予算で、チラシを作り、区内各公共施設などに置かせていただき、また会報でもお知らせいたしましたが、毎回20名前後の参加者があり、熱心な受講、質疑が行われました。その概要をお伝えします。

○第1回 10月21日(土) 10:00~14:30

「日吉の戦争遺跡」（その1） 来往舎前集合

午後 藤山記念館会議室

午前 連合艦隊司令部地下壕見学

昨年度の参加者も含め、23名の方々が参加されました。ガイド養成見学会ということで、始めに通常の見学会より詳しい説明が茂呂運営委員からなされて、各運営委員が地下壕及び寄宿舎などキャンパス内の戦争遺跡を見学・案内しました。

午後 各参加者の自己紹介や地下壕ガイドにあたっての抱負などを出し合った後、新井副会長から地下壕の歴史的意義やガイドにあたっての心構えなどがまとめとして話されました。



○ 第2回 11月18日（土）13:30～16:00

慶應義塾大学日吉キャンパス 来往舎 学習会「日吉の戦争遺跡」

司会 運営委員 中沢正子

① 目吉の海軍 運営委員 谷藤基夫

ガイドブック「日吉帝国海軍大地下壕」第III章「戦争末期の帝国海軍」第IV章「戦争遺跡のある町 日吉」を元に1934年満州事変から第二次世界大戦に突入、日吉に連合艦隊司令部が設置されたことについて年表で絶対国防圏から本土決戦の地図と年表で年代を追って説明。ガイドについては事実を踏まえ、自分なりの語り口で伝えていけばよいのではないかとまとめがあった。

② 日吉の丘の青春群像

運営委員 亀岡敦子

明治から昭和にかけて、日吉にそれぞれの時代、生活を営み、歴史を作った著して命を失った5人の人物像が紹介され

タウンニュース港北区
版(2006.12.7)

☆小嶋萬助 箕輪に生まれ、徴兵され、近衛兵になるが、西南戦争後の竹橋事件で首謀者の一人として処刑される。日吉の大聖院に墓石あり。享年23歳11ヶ月

☆上原良司 慶應大学経済学部在学中に徵兵猶予停止 学徒出陣 陸軍大尉 沖縄で特攻死
「きけ わだつみのこえ」の冒頭を飾る遺書を遺す 享年22歳8ヶ月

☆宅島徳光 慶大法学部繰り上げ卒業 海軍中尉 金華山沖にて一式陸攻機長として殉職
「きけ わだつみのこえ」に遺書。 享年23歳6ヶ月

☆愛新覚羅慧生　　満州國皇帝の弟　　愛新覚羅溥傑と嵯峨侯爵の令嬢浩との間に生まれる。
戦時中、日吉駅近くに疎開、在住。中国語を学び、日中の架け橋になりたい

と願っていた。また周恩来首相に父の釈放を願う手紙も書いている。同級生と天城山で心中、遺体で発見される。今も真相は不明。享年19歳10ヶ月

☆初代 水谷八重子 1921年映画「寒椿」井上正夫と共に演。戦時中井上正夫日吉に疎開。農家を借りて「演劇道場」を開き、水谷ら日吉に通う。現在この場所に碑が建立されている。

③ 日吉台地下壕保存の会の運動について 運営委員 喜田美登里

保存の会も17年目を迎える。昨年は小中高生向けに「戦争遺跡を歩く 日吉」を出版し、今年8月15日にはブックレット「日吉帝国海軍大地下壕」を出版、売れ行きは好調である。また「平和のための戦争展」はこれまで川崎と横浜の交互に10年間行われている多くの人に見学に来ていただきたい。地下壕見学は慶應大学が2001年に整備をし、安全に入れるようになった。大学は研究・教育のために見学を受け付けているが、保存の会はその案内を行っている。近年は見学者が増加し、会も定例会を毎月行っているが、見学者がこれ以上増えると案内は現在の運営委員だけでは難しい。また年齢的にも世代交代も考えていかなければならない。以下見学の仕方など説明。

○ 第3回 12月9日(土) 13:30~16:00
慶應義塾大学日吉キャンパス 来往舎

司会 運営委員 亀岡敦子

①「アメリカの日本本土侵攻計画と日本軍(海軍軍令部第3部を中心に)の対応について」 運営委員 茂呂秀宏

アジア太平洋戦争中アメリカ軍の日本本土侵攻計画はすでに1942年5月ミッドウェイ海戦の前から統合戦争計画委員会(JWCA)でたてられていた。その後サイパン陥落、レイテ作戦、硫黄島陥落を経て1945年3月本土侵攻のダウンフォール作戦が九州侵攻のオリエンピック作戦(1945年12月予定)と関東平野侵攻のコロネット作戦(1945年4月予定)を二本の軸にたてられた。予定の総兵力107万人余、コロネット作戦の上陸地点は相模湾とし関東地方を北上して首都東京制圧を目指すというものであった。さらに日本の対応については、米対日戦略爆撃調査団(USSBS)報告書で海軍軍令部第3部(情報部)については限られた人員、情報量の中で極めて精度の高いものであったと評価されている。しかし海軍中枢の情報軽視の傾向の中にあって、実際の作戦に有効に活かされるに至らず、精神論による特攻作戦などが立案の主流を占めた。これらの事例と実松譲ら海軍内部の情報将校の動向について詳細な年表と資料による提示がなされた。結語として山本五十六、栗林忠通、実松譲ら英米への留学、勤務経験のある、連合国との生産力の大きさを知る人々の合理主義的立場からの戦争遂行に対する批判をどう評価するかがこれから課題であるとされた。

②「近代戦争の拠点 神奈川～市民の立場で考える～」 本会副会長 運営委員 新井揆博 (詳細な地図・年表等資料あり)

1. 横須賀は明治以来首都東京の防衛拠点 (東京湾の要塞化)

神奈川県は首都東京に隣接していることもあり、明治以来軍事上の枢要地帯が形成された。横須賀鎮守府、猿島要塞、三浦半島の走水・観音崎・千代ヶ崎砲台など東京湾・三浦半島一帯に首都東京防衛のための軍事施設が造られた。



2. 侵攻の拠点 神奈川～横須賀と相模原を中心～

横須賀鎮守府、横須賀海軍工廠など横須賀には海軍関係施設が集中しているが、陸軍は内陸部相模原に昭和10年代に入って東京市ヶ谷から陸軍士官学校を移転させたのを始め、陸軍病院、兵器学校等軍事施設を建設した。さらに、横浜市奈良町には日本最大の陸軍弾薬製造所（田名部隊）、川崎には風船爆弾や偽札、生物・化学の謀略兵器の研究・開発にあつた陸軍登戸研究所があり、海軍は川崎に東京通信隊

蟹ヶ谷分遣隊が置かれ、神奈川は海外侵略の為の軍事施設が集中していた。

3. 本土決戦の拠点 神奈川

大本営陸軍部は1945年1月の大本営「帝国陸海軍作戦計画大綱」に基づき、3月「国土築城要項」を発令。7月までの全陣地骨格完成、10月までの完成を命ずる。国民義勇隊の組織化。内地・朝鮮に294万の兵力を展開するも、練度、装備とも劣悪・一億総玉碎思想の台頭。内陸作戦から水際決戦への転換。相模湾から上陸をすることが想定される米軍に對しては第53軍が当たり、湘南海岸を中心とする神奈川県一帯に主抵抗陣地を構築する困難な作業が行われた。川崎の高射砲部隊や国民義勇隊の例が示された。

【予定】

第4回 2007年1月20日(土) 10:00～14:30

午前 「日吉の戦争遺跡」箕輪方面 見学会

午後 まとめ 明治大学講師 渡辺賢二氏

☆ [速報] 慶應大学日吉キャンパスにおいて埋蔵文化財試掘調査、矢上キャンパスにおいて地下壕の測量調査実施される

桜井準也 (慶應義塾大学文学部)

慶應義塾大学文学部民族学考古学研究室では、2006年11月末に慶應義塾が日吉キャンパス第4校舎の敷地に計画している新校舎が建築されるのに先立って試掘調査を実施した（調査担当：阿部祥人教授、高山 博教授、安藤広道助教授、桜井準也助教授）。本調査の目的は新校舎建設予定地において、戦前に調査された住居址および古墳の再確認と旧石器時代の遺物包含層の有無を確認することであった。なお、ここは横浜市教育委員会による周知の遺跡

(No.45・46 遺跡) に該当し、1931年に調査された日吉台1号墳、1940年に調査された弥生時代竪穴住居址群が存在した地点にあたる。試掘調査の結果、当時の発掘調査の痕跡は確認できなかったが、今回新たに1940年の調査区域(II区)の周囲(I・III・V区)から複数の竪穴住居址を発見することができた。検出された遺構はI区から大型の弥生時代後期の竪穴住居址が1軒、III区から重複している3軒の時期不明の竪穴住居址、V区から弥生時代末～古墳時代初頭と思われる竪穴住居址1軒である。また、I～III区では浅いところで立川ローム層のV層、深いところでIX層(約3万年前)まで深掘り調査を実施したが、台地の平坦部分であったこともありローム層中から遺物は出土しなかった。今回の試掘調査は新校舎建設予定地の遺構を確認するにとどめたが、塾当局と日程調整したのち来春以降に本調査を実施する予定である。

また、これに先立つ2006年10月には矢上キャンパス内で相次いで2カ所から地下壕が発見されたため、急きょ測量調査を実施した。とともに擁壁工事に伴って発見されたものである。こ



作業風景

のうち、10月8日に測量調査を実施したのが矢上キャンパスの南側を東西に走る道路際から発見された地下壕である。位置的には矢上キャンパスに上がっていく緩やかなスロープ道路と急な階段のある道路の中間にあたる。入口は3ヵ所あり地下壕の総延長は約37mであった。壕の幅や高さは2m程度で入口付近は埋土で塞いではあったが、1ヵ所の入口付近には多量の

ゴミ(不燃物)が投棄されていた。内部には配電設備はなかったが比較的きれいに掘られており、昨年塾高の購買部近くから発見された地下壕(会報74号参照)と同様に本土決戦を想定して構築された「戦術用地下壕」である可能性がある。

次に、10月29日に調査を実施したのが、この地下壕と同じ道路沿いであるが東側の新幹線の線路を越えた丘陵の際から発見された地下壕である。地下壕は2ヵ所から発見された。このうち、東側のものは「コ」の字を呈し、平面形状で総延長約8m、壕は高さ2m、幅1.2m程度であったと思われる。内部は埋土に覆われ、その中にガラス瓶などの大量の戦後のゴミ(不燃物)が投棄されていた。これに対し、西側の地下壕は入口から三方向に向かって掘られているもので総延長約6mである。入口の天井は崩落していたが、壕の高さ・幅はともに1.2m程度であり、内部には陶磁器など戦後のゴミ(不燃物)が投棄されていた。ともに民家の建物のすぐ裏に掘られており、形状も安定していないことから住民によって掘られた民間の「防空壕」であると考えられる。

なお、矢上キャンパス内から発見された2つの地下壕(防空壕)については、次号の会報で詳細を報告する予定である。

連載

「日吉台地下壕 当時の関係者の思い出話」掲載復活について

「日吉台地下壕 当時の関係者の思い出話」1~33(慶應生協ニュース教職員版「連合艦隊司令部日吉台地下壕について」寺田貞治聞き書きより)を『会報』第24号(1993.9.22)~第55号(2000.10.4)まで、連載していましたが、諸般の事情により長い間中断していました。今更復活するのもどうかと思いますが、残りは当時参謀であった中島親孝氏の手記と地下壕を語るのに避けて通れない慶應高校生のレポートですので、掲載しこのシリーズを終了したいと思います。

再開第1回は連合艦隊司令部の通信・情報の参謀をされていた中島親孝氏の原稿です。

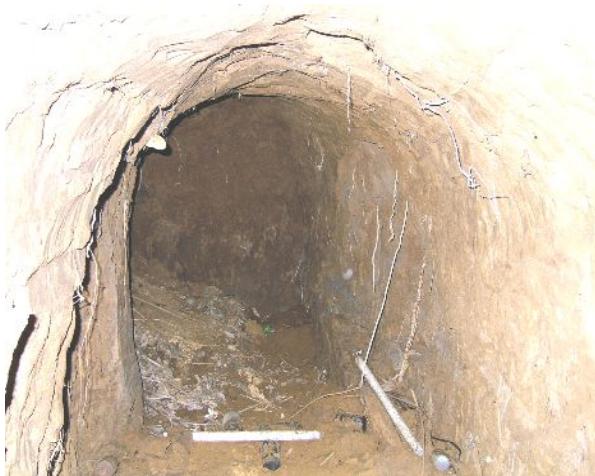
○日吉台地下壕 当時の関係者の思い出話 34

日吉司令部の思い出

中島 親孝

★連合艦隊陸に上る

昭和十九年六月、マリアナ沖海戦で多くの航空母艦を失ってしまったので、連合艦隊は戦艦、巡洋艦、駆逐艦、潜水艦その他の雑船と陸上飛行場を基地として作戦する航空部隊だけになってしまった。しかも、燃料が無いので、戦艦、巡洋艦は油田があるスマトラ島近くで訓練しなければならない有様である。新鋭の大型航空母艦支援のもとに攻略作戦を進めてくる米軍に対しては、戦艦、巡洋艦だけでは手も足も出ないので、航空部隊が唯一のたのみで、戦艦等を上味く組合わせることによってどうにか防ぎ止めようということになった。その航空部隊がまた、大本営の秘蔵っ子として、前年七月から育て上げてきた第一航空艦隊が、大した働きも出来ないまま潰えてしまったので、その後続隊として訓練中であった第二航空艦



東側壕内部

隊三〇〇機があるだけである。しかし、基地航空部隊は航空母艦の搭載機と違って、大海原で動いている点のような母艦に帰ってくるとか、動搖している母艦に着艦するとかいうような難しいことができなくてもいいので、部隊を増やしてゆける望みはあった。月産八〇〇機の生産力が頼みである。そこで軍令部とよく連絡して、編制、訓練飛行場をきめ、軍令部を通して海軍省、航空本部に希望を伝えることが重要になってくるので、連合艦隊司令部を東京の近くの陸上に移すことが好都合となってきた。

ところで、連合艦隊司令部として最も必要なことは無線通信の受信状態が良いことである。味方の艦艇、飛行機の行動を早く知るために、それ等の電波を直接受信することが重要なばかりでなく、敵側の通信を傍受していると、暗号が解けなくてもその状況をある程度察知することができるからである。従って司令部の場所を選ぶうえで先ず考えなければならないことは、近くに電気的雑音を出すものが無いことである。次に爆撃を受けることを覚悟しなければならないから、通信施設は勿論作戦室なども地下に設ける必要がある。そのためトンネルが掘り易く、湿気の少ないところが望ましい。なお、出来れば居住や差当りの事務室に使える不燃性の家屋があれば好都合である。また、夜中でも電報を受け、命令を出すのであるから海軍部内官庁からでも自然に区切られている必要がある。

このような条件を考えて場所探しを始めた。私は通信と情報を担当していたので司令部から離れることができないから、現場を見にゆくのは副官や手の離せる参謀にお願いした。その結果、慶應大学の寮が最も適当であるということになった。私の仕事を手伝ってもらっていた予備中尉の中に慶大出身者が居て、その説明により私はこの案を申し出していたので勿論大賛成であった。

この案に賛成した軍令部は早速海軍省に要求を出し、海軍省は学校側と借上げの契約を結び、施設本部に地下施設の工事を命じた。

★好機を見て引越

米軍が九月十五日にパラオ群島のペリリュー島とハルマヘラのモロタイ島に上陸して来た後は、その動きが静まったので、この間に司令部を移すことになり、九月二十九日、将旗を巡洋艦大淀から日吉の第一作戦司令所に移した。私は九月の始から虫垂炎で、ベットの上で状況判断と通信の指揮を続けていたが、この日初めて病床を離れることができた。

地下施設は工事の真最中であったから、藤原工大の東斜面にあった素堀の横穴に受信機を並べて、通信を受け継いだ。その日の夕方、設営隊指揮官（山本技術大尉？）が地下施設の設計図を持って打ち合わせに見えた。電信室の配線、電池室の排気、空中線の引き込み方などを決めた、電信室には当時市販されたばかりの蛍光灯を使うことにしたが、これは直接購入することにした。また、掘り出した岩はすぐに草や木の枝でカモフラージュが必要であると力説した。

ところで、第一作戦司令所という名が示すように、フィリッピン方面で戦闘が始まったならば司令部は台湾の高雄に出る計画で、高雄航空隊に第二作戦司令所を置く計画であった。豊田連合艦隊司令長官はフィリッピン方面の防備促進と作戦打ち合わせのため、幕僚三名を伴って十月二日空路マニラに向って飛び立った。三川南西方面艦隊司令長官、寺岡第一航空艦隊司令長官のほか、陸軍の寺内南方軍総司令官とも協議懇談して、目的を果したが、豊田長官が風邪で寝込み予定が二日ほど遅れたため、帰途台湾の新竹で米軍の空襲を受け、足止めされてしまった。作戦指揮は長官と無線連絡をとりながら日吉司令部で執つて支障は無かったが長官が日吉に帰り着いたのは二十日であったので、第二司令所に進出する機を逸してしまった。翌年四月の沖縄来攻の時は計画どおり鹿屋に進出したけれども左程効果が有ったとは思われなかった。

★丘の上の楽園と地下のみじめさ

南寮の二階の奥を長官室、長官寝室に改造、装飾無しの簡素な部屋に家具を海軍省から運び込んで一応形を整えた。その他の部屋も二つか三つ統けて参謀長、参謀副長、三長（機関長、軍医長、主計長）の部屋とし、階下の食堂はそのまま食堂兼会議室に使った。中寮は食堂を

作戦室と幕僚事務室に、各個室を参謀寝室に充て、ほとんど手を加えなかった。北寮は司令部付尉官の食堂と寝室に充て、食堂の近くに診察室と簡単な手術室を設けた。各寮とも床暖房で住み心地が良かったが、特に浴場は周囲が硝子張りの円形の大きな温泉風呂を思わせる豪華なもので、海から上った者に取っては格別に有難く、明るいうちに入浴して疲れを癒すことが出来た。南寮と中寮の間から地下施設に降りる階段は踊り場無しの一四二段(?)でわれわれ若い者は別として、長官、参謀長など老人には楽で無かったようである。

下士官共用の二段ベットを地下壕に設ける計画であったが、差当り壕の南に向った入口の外に丈の低いかまぼこ小屋を作り、掘り出した土砂で覆った。フレームの様で暖房無しでも案外暖かであったという。地下壕の方は湿気が多く底冷えして冬は住み難かったらしい。長官以下全員地下に寝台を設けたが、作戦室の近くは通風が悪く湿気も多く寝る気がしなかった。

食糧自給を考えて寮の庭で鶏を飼うことにしたが餌をやっても一向懷いて来なかつた。それに反して、長官が台湾から貰ってきた七面鳥はよく懷いて寄つて來た。飛行機の爆音が聞こえると雛を羽の下に入れて庇う様子はいじらしかつた。鶏の方はわれ先に小倉に逃げ込む姿にも可愛気が無かつた。

★東京初空襲

十一月一日、昼食が終つて外に出ると四発の飛行機が一機非常に高い空を悠々と飛んでゐるのが見えた。南方で見慣れたB-17を細身にした如何にもスマートな姿である。飛行機雲を引いているから相当の速度であろう。それがゆっくり動いているように見えるから一万米以上の高度と思われる。いよいよサイパン島からB-29の爆撃が始まると覚悟していたところ、同月二十四日一〇〇機くらいの初空襲があつた。三鷹の中島飛行機工場がやられたといふ。

この頃から軍令部、海軍省の疎開が始まった。最初に情報を担当する軍令部第三部が高校の校舎に來た。情報を聞きによく出かけたが後にわれわれの東に出来た大きな壕に移つた。艦隊の壕も東向きの出口が出来たので行き易くなつた。その他の部門は何がいつ来たかはつきりしないが、余り関係の無い部門だけであつた。

★最後のあがき

レイテ沖海戦で水上艦艇とようやく出来上つた航空隊を失い、沖縄の戦闘では飛行機を出来る端から失つた。爆撃訓練の不足を体当たりで補い、人間魚雷を操つて艦艇の劣勢を補つた若者たちの純真な努力も傾いた大廈を支えるによし無く、沖縄の運命も旦夕に迫つた昭和二十年四月二十五日、連合艦隊司令部は海軍総隊司令部と名を改め、総ての海軍部隊を率いて本土の守りを固めることになった。

木造の藤原工大が焼かれ、東京の街が大半焼野原となり、呉、佐世保の軍艦が潰されてしまつても、霞ヶ関の地下に潜つた軍令部と電話連絡をとりながら日吉の地下では悲壮な討論を重ね涙を拭いながら命令を提案した。

八月十五日、一切の戦闘行為停止の大命を各部隊に伝え、一週間以内に多摩川の北に移るという命令に副うために、不要書類を焼き第一次解員の促進に努め、二十三日(?)目黒の海軍大学校校舎に移つた。

(慶應生協教職員版第44号より転載)

○日吉台地下壕 当時の関係者の思い出話 35

慶應義塾高等学校・文化地理研究会

1985年10月の慶應義塾高等学校日吉祭で文化地理研究会が発表した日吉台地下壕について、当時、歯科医であった日吉本町の川田氏夫妻から同研究会が聞き取つた話を紹介します。この報告が日吉台地下壕に関する資料としては初めてのものではないかと考えられます。

知らねばならない側面—防空壕が日吉に暮らす人々に与えた苦しみ—

川田夫妻の話より

1. はじまり

ある日、川田氏をはじめとする日吉の人々は、午後九時、現在の理工学部の敷地に海軍から召集を受けた。そしてその時刻、集合した人々の目の前には、一人の主計将校（大尉であろうか？）の姿があった。彼は手にした軍刀で一度ドスンと床を打つと「お前達の地所を買収する。なお我が国が勝利を収めた暁には、元の状態に戻してこれを返す」ただ、それだけをいった。もちろん、拒絶する訳にはいかない。（その様な事をしようものなら、國賊扱いでいる）全員「はい、喜んで」と言う以外になかった。御無理ごもっともお国の為なら、という時代だったのである。

こうして、普通部側の海軍地下施設の建設と、そして人々の苦しみは、いとも簡単に、そして、あまりにあっけなくその幕を開ける事となった。

2. 工事の開始と食糧難

工事が始められた。静かな日吉の町は、徴用（1日いくらかで雇われていた一般労働者）でとられてきた多くの邦人、朝鮮人（多くは後者であった）、そして軍人の往来する町となり、いよいよ“戦争”というものが直接その影を落とし始めたのである。この事により、人々の生活は急速に侵されていった。

まず第一に作業場が裏山に位置する為に庭を人夫が通り抜け、土砂を積んだトロッコが縦断する。そして、困った事に彼等の作業で農家の人々が汗水たらして働いて作っていた田畠は埋没し、食糧は得られなくなった。さらに、軍の幹部は人々の家に寝泊まり、折角自分の大切な着物等を交換して得た米そしてミソ等は徴用した人夫に手づかみで取られ、盜難も横行したが軍当局はそれに対する取り締りは行わなかった。（それさえ行う余裕が無かつたのである）

盗品はそれぞれの故郷へと送られたらしい。日吉の郵便局に、当時、小包の数が急増したとの記録が残っている。とかく、物の無い時代、人は自分本位に走ってしまうものである。

工事が本格化してくると、壕内ではハッパがかけられ始めた。物凄い地響きがすると共に家の壁が崩れて行く。（当時の家屋には、泥壁が用いられていた）

門戸は開き放して日夜庭を人が通り抜けれる。家の周囲の木は入り口のカモフラージュになるので、切る事を禁止され、夜中、闇に紛れてまきを取りに来る始末であった。

まさに自分の家に住んでいながら、そうでないような状態が続き、生きた心地さえしなかったと川田夫妻は語っている。

「某月某日〇〇家は、家を南に移せ」という命令が各々の家に対し軍から出された。田畠を埋め尽くして、さらに余りある土砂を今度は裏山の山根に盛ろうと言うのだ。つまり山根が南の方へ延びる事となり、そこで家屋も移動しなければならないという訳である。連日のハッパによる振動で弱りきった家をさらにいためつけられ、移動を強要された誰もが建てかえのやむなきに至った。（この時川田夫妻宅は、家の前にカムフラージュに重要な木があり、移動にいたる事に手間取り、そのまま終戦を迎えた）

度重なる軍の横暴と食糧不足とに疲れ切った人々の心はすさま、生活は混乱状態に陥っていた。善惡の意識は薄れ、世の中もどうもおかしくなってきた。

3. 空襲

「なんだか知らないが、この頃空襲警報がよく鳴るなあ」。工事で騒がしい日々、川田夫妻はそんな事を考えていた。家の物置は親戚の家から疎開してきた荷物で一杯になっていた。

そんなある日、空襲警報と共に北西方面からB-29が飛来した。川田夫妻は工事中の壕へと急いだ。「誰だ！」「川田です!!」「よし、入れ」。附近の住民は壕の中への避難が許可されていたのである。

これが唯一防空壕が造られた事により、救われた事だったと川田夫妻は言う。B-29は南東方面へ日吉本町の川田家周辺から大聖院附近、そして本校の建つ丘の南側の家並に爆撃を加えつつ飛び去って行った。

川田夫妻が家へ戻った時、物置は、焼けただれて倒れた外柱と、油がかかり蒸し焼きにされてしまった米俵以外はその太い梁でさえあとかたも残っていなかった。その時こんな田舎

町まで空襲される様ではもう危ないな、と川田夫妻は思った。

焼夷弾やキャップをはずすと爆発する万年筆型爆弾や拾うと爆発するリンゴ型爆弾により、多くの人がその命を落した。

川田氏は歯科医でありながら、この地域に医者と名のつく職にある人が氏を含めて二人しかいなかつた為、軍の命令で検死にかり出された。その時の話であるが、どうしてもその日のうちに一人発見する事が出来ず翌日に持ち越した。果たしてその一人の遺体は発見されたがそれは前の日の搜索地点のすぐ頭の上の土蔵にはりついていたとの事である。こんなに滅茶苦茶な状況の下よく死なずに済んだものだーと川田氏は語っていた。日吉に対する初空襲の時の事である。

当時は一般の人々の知る所ではなかったが、高校側の地下壕は連合艦隊司令部として機能しており、豊田長官はじめ司令部一同はここから、“沖縄特攻作戦”等の指揮をとっていた。しかしこの地域は時既に米軍の作戦地図に大きな赤丸がつけられていたと歴史は語っている。軍部が勝手に造り始めた地下壕の為についに人の命までもが奪われるに至ったのだ。

4. 社会的混乱と終戦後

工事用のハッパと空襲により家はがたがたになり、又、家の内情も火の車だった。社会と経済は混乱し貨幣は通用しなくなってしまった。

[川田さんは、山二千坪。田畠千坪、宅地五百坪を計三万円（非常に安い）で軍へ売ったものの結局そのお金は返済金（戦後土地が返ってきた時政府に支払った金）を支払うまで殆んど使うことがなかつたという]

人々は着物等と食糧を交換し、まるで大昔の時代へと戻ってしまった様な感じを受けたと川田夫妻は語っていた。

又、芋のつるを配給により得、何とか生計をたてていた。これらの苦しい生活について川田夫妻は自分の年齢を判定することすら出来なかつたと語っている。

そうしているうちに戦争は終をつけ海軍は消えて行くこととなる。防空壕は無用の長物と化し、土地は元の人々へ返済される事となった。土地の人々は買収の時より安い金額を国へ返済した（差額は補償金とされた）。しかし、事は終つた訳ではなかつた。又、終る筈もなかつた。

何故なら、山には穴が残つており、田畠は土砂で埋めつくされ、一尺（約30cm）掘れば大岩が出るという状況で補償金が出ているとはいえ、田畠の開墾をせねばならず、経済混乱もあり、大して役に立たなかつたといえよう。

我々に見えにくく、また当時の軍政の無責任さというものを最もよく表していた問題として次の様な事がある。それは壕の建設過程においていやおうなく家の位置を移動させられた事により人の所有する土地に家が建つてしまつていう事が起つたのだ。平和な時代が訪れるところは大問題だ。土地の所有者としては、立ち退きを要求する所であるが、移された側にとっては軍の横暴により、自らの意思とは全く関係のない方向へと進まされたものである。

とはいえる、土地は既に個人所有のものとなつてゐる為、今や完全に個人と個人の問題となつてしまつてゐるのだ。すぐに考えつくのが土地の交換という方法であるが、日あたり等の問題で土地にも優劣というものがある為、思うようにはいかないのである。結局、この問題は二十年もの間住民同士の間で争われた。

支払われた返済金も大蔵省に納められたとの事だが、何分にも乱世の事である。あやしいものではないかと思われる。

●作者から

以上が今回の研究において色々な事を考える上で多くの大きな鍵を提供して下さった川田夫妻の話である。

最初の訪問を終え学校に帰る道々、我々は防空壕にテーマをとつてるのは良いが、しかし我々に見る事の出来る範囲だけを調べたのではどんなに奥深く調べたところでそれは何かの

抜けた何か薄っぺらな物となってしまうのではないかと考えていた。

なる程そうである。題材が“戦争”と関係しているからには、当然そこには人々の苦しみというものが積み重ねられている筈であり、又、それを見ずには戦争の本質、つまり、それによりどれだけ人が人間性を失ってしまうかを見る事が出来なくなってしまう。これは間違った、そして大変危険な角度から戦争というものを見てしまう事を意味するのではないかと心配である。

時、まさに戦後四十年、しだいに悲惨としか言い様のない戦争を知らない世代が人間の大半を占めつつあり、殊に直接それを経験し次の世代へと伝える事の出来る人が極少数となってしまっていると言える。

このままでは“戦争”というものを曲った観点から見て平気な顔をしている人に対し、軌道修正する人が、または物が世の中から消え去り、再び人類に愚劣な行為の繰り返しをさせる事にもなりかねない。

結局、人を残す事は不可能であるので、せめて我々がその人達から学び何か他の人々に考える鍵を与える物を残さねばならないと考えている。

ただ、自分の乏しい文才の為、川田夫妻の貴重な体験談をしっかりと伝える事は出来ていないと思われるが、しかし、僕達のこのささやかな作品が今まで長々と述べてきた、いわば今生きている人間に科せられた最も重要な仕事のほんの一角にでも加えられるならば自分にとってこれ以上の幸せは無いと思っている。

最後に今回の研究に御協力下さった先生方、川田夫妻をはじめとする日吉在住の方々、並びに父兄の皆様に厚く御礼申し上げます。

一九八五年十月

慶應義塾高等学校・文化地理研究会

(「連合艦隊司令部日吉台地下壕について」寺田貞治氏聞き書き 慶應生協教職員版第48号より転載)

今回をもってこのシリーズは終了いたします。連載中断などでご迷惑をおかけしたことをお詫びいたします。

●活動の記録 2006年9月～2007年1月

- 9／15 運営委員会 会報80号発送(慶應高校物理教室)
- 9／16 9月定例見学会① 67名
- 9／26 地下壕見学会 ブイエイジクラブ・茅ヶ崎市生涯学習 21名
- 9／27 地下壕見学会 慶應義塾職員 30名
- 9／30 9月定例見学会② 51名
- 10／1 日吉キャンパス自然観察会(案内 日吉丸の会) 16名
- 10／3 地下壕見学会 慶應大学武藏小金井寮O B 30名
平和のための戦争展実行委員会(法政第二高校)
- 10／8 矢上キャンパスの防空壕調査
- 10／13 地下壕見学会 駒林小学校6年生 90名
- 10／15 寄宿舎同窓会「寮和会」と懇談
- 10／17 運営委員会(慶應高校物理教室)
- 10／20 地下壕見学会 日吉台小学校6年生 130名
- 10／21 第1回戦争遺跡ガイド養成講座 フィールドワーク日吉台地下壕 「日吉の戦争遺跡の特徴」(藤山記念館)
- 10／28 10月定例見学会 51名
- 10／29 「戦争の記憶を絵に」絵画教室(日吉地区センター 戦争展関連企画)
- 10／30 地下壕見学会 矢上小学校6年生 100名 専修大学英米文学科 15名

- 11/1 地下壕見学会 慶應高校生 16名
 11/7 地下壕見学会 港北小学校6年生 107名 川崎市立西生田中学校 79名
 11/9 地下壕見学会 逗子市さくら会 26名
 運営委員会(日吉地区センター)
 11/10 地下壕見学会 川崎市高津市民会館 41名
 11/11 11月定例見学会 47名
 11/12 靖国神社見学ツアー (戦争展関連企画)
 11/13 地下壕見学会 大綱小学校6年生 81名
 11/14 平和のための戦争展実行委員会(法政第二高校)
 11/15 地下壕見学会 麻生九条の会 30名
 11/18 第2回戦争遺跡ガイド養成講座 「日吉の海軍」「日吉の丘の青春群像」「日吉台地下壕保存の会の活動について」 (来往舎会議室)
 11/20 第14回 横浜・川崎平和のための戦争展 準備作業 (来往舎ギャラリー)
 11/21~25 第14回横浜・川崎平和のための戦争展開催
 (慶應義塾来往舎ギャラリー・会議室)
 テーマ「日本人の戦争観を問い合わせなおす」 展示・イベント
 11/22 地下壕見学会 サラリーマンOB会 39名
 11/23 港北区ふるさとサポート事業中間報告会 (港北区役所)
 11/24 地下壕見学会 セカンドライフクラブ 36名
 12/2 12月定例見学会 91名
 12/4 地下壕見学会 立命館国際平和ミュージアム・安斉育郎先生と行く平和ツアー in 神奈川 26名 講演 安斉育郎氏(藤山記念館)
 12/9 第3回戦争遺跡ガイド養成講座 「近代戦争の拠点・神奈川」「アメリカの日本本土侵攻計画と日本軍の対応について」(来往舎会議室)
 12/15 地下壕見学会 藤沢市平和ツアー 30名
 12/20 12月運営委員会 (日吉地区センター)
 12/26 地下壕見学会 洗足学園高校1年生 10名
 1/11 地下壕見学会 悠遊文学散歩の会 57名
 予定
 1/17 1月運営委員会 会報81号発送 (慶應高校物理教室)
 1/20 第4回戦争遺跡ガイド養成講座 定例見学会 1/27 2/3 2/10

定例見学会は毎月第4土曜日に行ってます。なお日程が変わるものもありますので必ず見学窓口に申し込んでください。(見学申込先 TEL&FAX 045-562-0443 喜田)

連絡先(会計) 亀岡敦子: 〒223-0064 横浜市港北区下田町5-20-15 TEL 045-561-2758
 (見学会・その他) 喜田美登里: 横浜市港北区下田町2-1-33 TEL 045-562-0443
 ホームページ・アドレス: <http://www.geocities.HeartLand-Hanamizuki/2402>

日吉台地下壕保存の会会報 (年会費) 一口千円以上
 発行 日吉台地下壕保存の会 郵便振込口座番号 00250-2-74921

代表 大西章 (加入者名) 日吉台地下壕保存の会
 日吉台地下壕保存の会運営委員会